# 怪話篇 第九話 鏡の村

K1.M-Waki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
怪話篇　第九話　鏡の村

【Ｎコード】
Ｎ７１２３Ｔ

【作者名】
Ｋ１．Ｍ－Ｗａｋｉ

【あらすじ】
ある男性の不審死を捜査する刑事達がたどり着いた山奥の寒村。
一見普通の村に見えたそこにはある秘密が…

# 怪話篇　第九話　鏡の村

## 1

「ねえ警部ぅー、本当にこんな所に村なんか有るんですかぁー。」
「有る。ちゃんと役場でも調べた通りだ。道も・・・・、間違ってない・・・・と思う。」
「でもぉー。警部ぅー、少し休みましょうよぉー。もう三日目ですよぉー。今日も半日近くも、こんな山の中を歩いてるんですよぉー。もういい加減、あきらめましょうよぉー。行き倒れの身元調査なんて、やったって無駄ですよぉー。警部ぅー、こんな事してたら、こっちが、行き倒れになっちゃいますよぉー。」
「もう直ぐだから頑張るんだ、新井。確かに無駄になるかも知れん・・・・。しかし・・・・、死体の異常さと本庁の対応を考えると・・・・。俺は、自分で納得のいくようにしたいんだ。」
「異常さって、大した事ないじゃないですか。都会へ出て来た田舎者が、喰う物が無くなって餓死しただけ。それだけですよ。本庁が、司法解剖もせずに火葬にしたのだって、そんな必要がなかったからですよ。」
「それが、おかしいんじゃないか。害者は、現金を十五万も持っていたんだ。おまけに泊まってた旅館には、前金で2週間分も払ってあるんだ。旅館で俺が訊きこんだところじゃあ、やっこさん、まずそうにだったが、ちゃんと飯だけは食ってたんだ。それも餓死した1日前までだ。いくらなんでも、おかしいと思わんか。たった1日飯を喰わなかっただけで、人間が餓死するんだろうか？」
「それはぁー、・・・・減量でもしてて、普段からあまり量を喰ってなかったんでしょう。」
「いや、確かにあまり食は進んでるようには見えなかったそうだ。

だが、いつも全部平らげてたそうだよ。ん？おい！新井、村が見えるぞ！」
「あっ、警部。あれですね。N県N郡加賀美野村・・・・本当にあったんだ。」
「よし、いくぞ、新井！」
「警部ぅー、待って下さいよぉー。あっ、警部！あぶない、そこは崖に！」
「新井ー！来るなっ、ああっ、わー・・・・」
「わぁー、警部ー・・・・」

2

「・・・・つっ、・・・・ああ。こ、ここは・・・・」
「未だ、動いちゃいかんよ。あっちこっち傷だらけなんじゃから。」
「ああ・・・・崖から落ちて・・・・。ココは加賀美野村なんですね。私の他にも、若いのが一人いたはずだが、どうしたんです？」
「あっ、ああ。連れの若い方の人は、別の部屋じゃ。あんたは、安心して養生するとええ。」
「すいません、御迷惑をかけます。」
「しかし、あんたさん方は、なんでまたこんな山ん中までやって来たんだ。道に迷ったのかや。それとも・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・実は、守山鏡助という人物について調べているんです。彼は、この村の出身ですね。御存じありませんか？」
「守山・・・・、ああ、あの鏡助か。知っとるよ。あん馬鹿者がぁ、行っちゃぁいかんと言うのに、親父と翁さんのへそくりをみんな持って、村ぁ出て行きゃーがった。あんの馬鹿ぁーは、今頃どっかでのたれ死んどるだろうよ。」
「そうですか・・・・。彼の家は、近くなのですか？」
「いや。村外れでのう、そうさなぁ・・・・歩いて半日程かのう。」

「そうですか・・・・。いえ、守山は東京で行き倒れになって死んでたんですよ。それで彼の血縁の方に、状況をお知らせしようと思い・・・・」
「そうじゃったか。そうか、鏡助は死んじまったか・・・・、やっぱりなあ。それは、遠くからわざわざすまんこってす。おまけに、こんな怪我までこさえてしもうて。鏡助の親父にゃぁ、わしから言っとくから、あんたはココでゆっくりしてくとええだ。あの、若い方の人もちゃんと面倒みとくから。」
「すいません。ではお言葉に甘えて、御厄介になります。怪我が直ったら、守山さんには私もあいさつに行きますから。」
「ああ、わかっとる、わかっとるよ。守山の親父の所へは、わしから言っとくから。」

3

「お食事ですよ。食べられますか?」
「ああ・・・・、あっ、ありがとうございます。・・・・いっ、いただきます・・・・。」
「やっぱり、こんな田舎の食べ物は、都会の人のお口には合わなかった様ですねえ。」
「いっ、いえ。そんな事は・・・・、ごふうっ・・・・あっ、ありませんよ。」
「はあ、・・・・でも、あまり無理をなさらない方が・・・・。」
「いや、この苦味が、ぐふっ、なかなかよろしいんじゃ・・・・ないでしょうか。体力をつけんと、身体が直りませんから。」
「でも・・・・、もう4日目なのに、かえってやつれてきていますし。まるで、何もお食べにならなかったみたいに。」
「えっ。今、何とおっしゃいました。」
「えっ?ええ・・・・だから、この4日間何も食べてないように見えるなぁと。ちゃんと毎日、3度3度の食事をしてらっしゃるのにねえ、ほほほほ。」

「そうですねえ・・・・。・・・・・ああ、それはそうと、・・・・私、前から訊きたかった事なんですが・・・・」
「どうして村人がココから出ていかないか、その理由ですか？それとも、何故、他所の人達が一人も訪ねて来ないのか、という事ですか。」
「参りましたねえ。探偵になれますよ。まさにその通り。どうしてなんです。大人達が村に留まるのは、未だ判ります。しかし、若者までが、・・・・まあ鏡助は例外ですが、ここに居続けるのは、言っちゃあ悪いが不自然です。」
「そう難しく考える必要もないでしょうに。この村の周りは、険しい崖と谷間がありましてねえ。おまけに、山道を越えるのにも一日がかりでしょう。だから、出たくないんじゃなくて、外へ出る道がないんですよ。」
「道がなければ、作れば良い。橋がなければ橋も作れば良いじゃないですか。そうして人間は道を切り開いて来た。どうしてこの村だけが・・・・」
「この辺の土地は、何でも溶岩が固まった物だそうでしてねえ。硬い上に、迷いこんだら磁石も当てにならなくて、何でしたっけ、そうそう富士山の麓みたいに人を寄せつけないんだそうですよ。」
「・・・・・・・・・」

## 4

「どうかね。食は進んどるかな？」
「ええ、この肉だけは何とか。」
「すまんのう。ここには、あんたの口に合うような物がないもんでのう。」
「・・・・・・・・」
「どうなすった。」
「前から訊きたかった事があります。」
「何じゃね・・・・・。」

「実は、私は警察のものなんです。」
「知っとったよ。」
「そうですか。やっぱり・・・・・。」
「あんた、鏡助の死に方が気に入らんのじゃろう？」
「そうです。何故、彼は食事をしながらも、餓死してしまったのか？何故、親類も知り合いも、亡骸を引き取りに来なかったのか？確かに、こんな山の中から東京まで出て来るのには、大変な事でしょう。しかし、自分の息子が死んだというのに、亡骸を引き取りにも来ない親がいるのでしょうか？」
「わしらはのう、この村からは、出られんのじゃ・・・・・。鏡助は、親が止めるのも聞かんと、飛び出してしまいおった。駈け落ちでもするつもりじゃったのじゃろうが、娘の方はとうとうついて行けなんだ・・・・。今にして思えば、鏡助のやつが一人で出て行って一人で死んでしもうたのは、・・・・不幸中の幸いじゃったろう・・・・。」
「どうしてです！どうして、そんな事が言えるんです。どうして、村からは出られないんです。奥さんは、村から出て行く道がないからだと、言っていた。だが、・・・・本当は食べ物が違うからじゃないですか？」
「・・・・・・・・」
「違いますか・・・・・。」
「・・・・わしらは、この村以外では、生きてゆけん。この村の食い物以外は、食えん。あんたが、この村の食い物を受けつけんのと同じにな。」
「やっぱり・・・・・。しかし、何故なんです。何故、食べ物が・・・・」
「ここは、『かがみの村』じゃからじゃ。」
「加賀美野村？」
「・・・・・・・・」
「加賀美の、かがみの、・・・・鏡の村！」

「そうじゃ、鏡の村じゃからなんじゃ。鏡の村に生まれた物は、外では暮らしていけん。外の食い物は食えんからじゃ。」
「そうか、・・・・わかったぞ。これでも私は、昔医者を志したことがあるんだ。今でも、生化学なんかには興味をもってる。お前達は、我々の鏡像体だな！」
「ふん。やっと気がつきおったか。わしらだけじゃのうて、この辺一帯の動植物全ての細胞を構成しとる糖やアミノ酸は、おまえさん方の光学異性体なんじゃ。所謂、D型アミノ酸じゃのう。DNAからして、逆巻じゃからのう。心臓もちゃんと右に付いとるよ。触ってみるか？」
「そうだ。炭水化物も蛋白もアミノ酸も、我々とあなた方とでは光学異性体の関係にあるんだ。だから、酵素がそれと認識できずに、消化も吸収もされない。食べても、食べ物だという事が判らないんだ。それで、鏡助は東京で餓死したんだ。私が、ココの食物を受け付けなかったのもその所為だ。」
「酢や簡単なアルコールみたいに、キラル中心の無い様な分子は別なんじゃがな。じゃが、気付いた所でどうなる。あんた、わしらを普通の人間にしてくれるか？」
「そんな、これは驚くべき事ですよ。生物学の常識を無視してるような現象だ。なにしろ、この辺一帯だけ、鏡像体の生物群が生きているんですから。学問が、根底からひっくりかえるんだ。しかし、どうして、この辺だけ・・・・」
「昔、神様になろうとした男がおってのう。わしらは皆、失敗作なんじゃ。」
「何ですって。では、貴方達は、・・・・」
「ココは、失敗作のごみ捨て場じゃ。」
「この辺全てが、・・・・。」
「肉は美味かったじゃろう。」
「えっ？」
「・・・・『その肉』だけは、美味かったんじゃろう。あんたには、

食えるやつじゃからのう。」
「そういえばそうだ。だけど、・・・・まさか。あっ、新井は、新井はどうしたんだ。」
「もう居らんよ。あんたが喰っちまった。なかなか美味かったろう？」
「・・・・ぐうっ・・・・貴様あ、よくも。」
「勿体ないのう。おまえさんが生きる為に、若いのが肉になったのにのう。」
「嘘をつけ！俺は、許さん。」
「それで、わしを殺すかね？あんたらにとっちゃあ、わしらは人間じゃあないからのう。じゃが、わしらにとってみても、それは同じ事なんじゃ。それに、殺した処で、喰う訳にもいかんからのう。肥料にもなりゃせん。剥製にでもするかの？どのみちあんたは、この村からは出ていけんのじゃ。還った処で、気違い扱いされるだけじゃからのう。それにあんたは、人間を食っちまった男じゃ。もう普通の町じゃあ、生きてはいけんよ。」
「うるさい。俺は、世間に公表するぞ。」
「無駄じゃよ。松戸の殿さんには、総理大臣も太刀打ちは出来んよ。何せ、その大臣からして殿さんの力作じゃからのう。もっとも、あんたが、わしらを真っ当な人間に直してくれるなら、考えても良いが。あんたに、そこまで学がある様には見えんからのう。まあ、死ぬまでココで暮らしなされ。そう長いこっちゃあないじゃろうし。」
「くっ、くそう。くそう・・・・。こうなったら、・・・・こうなったら、とことん生きてやる。生き抜いてやるからな！」
「勝手になされい。酒と酢だけでも、生きて行けるならのう。」

ｅｏｆ．

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7123t/

怪話篇 第九話 鏡の村

2011年10月9日03時54分発行